

### 早野勘平像の形成：義士物浮世草子の果した役割

中込, 重明 / NAKAGOMI, Shigeaki

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

43

(開始ページ / Start Page)

50

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

1990-11-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019617>

# 早野勘平像の形成

——義士物浮世草子の果した役割——

寛延元年（一七四八）竹田出雲・三好松治・並木千柳合作の「仮名手本忠臣蔵」が大阪竹本座において初演される。この一大傑作が生まれた原因を探るに、右三作者の努力もさる事ながら、元禄十六年の討入事件後に脚色された「仮名手本忠臣蔵」（以下『忠臣蔵』）の先行たり得る作品によって熟された文学的時間経過も忘れる訳にはいかない。しかし是まで、この「忠臣蔵」の先行作品は数多く研究の舞台にのぼったにもかかわらず、それら多くが歌舞伎・浄瑠璃史を遡る事ではか研究が行われなかった事は否めない。祐田善雄氏が『「仮名手本忠臣蔵」成立史』<sup>(1)</sup>のなかで、歌舞伎・浄瑠璃以外の小説（浮世草子）実録の先行作品に目を向ける重要性を、いみじくも暗示した指摘は確実に検討されるべき余地を残して今日にある。現在、浮世草子・実録物に「忠臣蔵」の先行作品の研究視野をひろげ、最も進んでいると言えるのは土田衛氏による日本古典集成（新潮社）「浄瑠璃集」所収「仮名手本忠臣蔵」の頭注であろう。当論文では「忠臣蔵」最大の人気者である早野勘平の描かれ方を中心

## 中 込 重 明

に、その他勘平にからむ登場人物の原像を実録・浮世草子のなかに捜してゆく事にする。土田氏の貴重な作業に、ある時は重複しつつ、少しでもそこに追補の成果が上げられ、「忠臣蔵」先行作品の一試論になれば幸いである。

○

論文の展開上「忠臣蔵」の早野勘平の描かれ方を再現しておく。三段目。塩谷判官に仕えていた勘平は足利館前で、判官の妻顔世の手紙の使いとして来たお軽に会う。かねてから馴染んでた二人は場もわきまえず逢引にしけ込む。その間、判官の刃傷事件。勘平が事件を知った時は既に遅く、裏門からも入る事ができない。勘平は大事な所に居あわせなかった失態を恥じ、切腹しようとするがお軽に止められる。行き所に困った勘平は仕方なくお軽の故郷山崎へ落ちてゆく。五段目。時経って今や獵師の勘平は、或る夜山崎街道で浪士千崎弥五郎と遭遇。弥五郎の暗示めいた口吻に仇討ちの日の

近い事を察する。丁度その頃、お軽の父与市兵衛は夫のために身を売ったお軽の前渡金五十両を持って山崎街道を家路に急いでいた。そこに、大石内蔵助と袂を分った斧九太夫の倅定九郎が山賊に身をおとして現れる。そして与市兵衛は嘆願も虚しく財布を取られた上に惨殺される。するとまたそこに、猪を追ってきた勘平の鉄砲の玉が飛んできて定九郎に命中する。猪を仕留めたと思つた勘平は、近づいて人だと判り驚くが懐に財布があるのに気がつき、つい出来心で主君の御用金として着服してしまふ。六段目。主人が帰つてこないと心配している与市兵衛の家。身代金の残りの五十両を持ってきた一文字屋は、与市兵衛の帰りを待ち望むお軽を強引に連れてゆく。入れ違いに近所の狩人が与市兵衛の死体を戸板にのせて運んでくる。与市兵衛の女房は、これに泣きながらも婿勘平の不信な様子を感じとり、血のついた財布を勘平の胸から見つけ「こなたが親仁を殺した<sup>(2)</sup>」と責めはじめ。そこに浪士原郷右衛門・千崎弥五郎の二人が、既に勘平が渡した先の五十両を「不義の者から金はもらわぬ」と返しにくる。そして取り込み中の事情を知るや、二人も女房と共に勘平の不義理を責める。たまらず勘平切腹。その後、与市兵衛の傷あとから無実が判るが時遅く、断末魔の息の下連名状の血判が許され死んでゆく。

さて、この勘平のモデルが実在の赤穂浪士・萱野(茅野ともある)三平重実であると言われて久しい。と言つても、萱野三平に関する記録にあたるだけで「原勘平」なるものが浮上する訳ではない。モデルが創作人物に与える影響が本質的な面に大きいとしても、その全面に及ぶ例は極めて少ないと思える。この事を説明する

には丁度「忠臣蔵」の加古川本蔵がいい例になる。この本蔵のモデルには大田南畝が唱えた(『平日閑話』)事で知られる角沢大学(又は角藤大学)・そして多胡主水・梶川与惣兵衛があげられている。前二者には、いずれも「忠臣蔵」前半で本蔵が見せたような行動が実際にあったとまことしやかに言われている<sup>(3)</sup>。また、大奥の留守居番であった梶川与惣兵衛には、その名前の類似と殿中で浅野内匠頭を背後から本蔵同様に抱き止めた史実があり、この点だけから見れば本蔵と梶川は動かし難い。要するに、モデルが誰かと問う場合、一創作人物に一実在の人物という事に執着するのはナンセンスだという事である。一創作人物の造型にあたって、複数の実在ならびに非実在の人物を巧みに織り込んでゆく事は頻繁に行われていたと思え、またその方がよりよく調査された一創作人物を仕上げるには都合だったに違いない。故に、実在の人萱野三平は重要だが、あくまで早野勘平誕生の一要素にすぎず、勘平はそれまでの実在・非実在の結晶的人物像である。この事を十二分確認した上で勘平像形成までを見てゆきたい。

まず、登城の際塩谷判官に仕えていた早野勘平がお軽に会ったため、つい大事の場に居あわせなかつた事について。萱野三平は浅野内匠頭が江戸城にて吉良上野介に刀をあげた時、浅野の近侍として伴廻の者であった。だからこの勘平の描かれた方も三平の状況を基にしたと言えそうだが、伴廻は三平一人ではないので共通していると言っただけに止める。また、色にふけていたため、主君の傍を離れてしまったという記録は、適当なのが実録物には見当たらないが、この件については既に明治期に青木苦竹が西沢一風の浮世草子「傾

城武道楼」(宝永二年)に同型のものがある事を指摘している。(4)この作品は赤穂事件を遊女の仇討ちにやつしたもので、確かに二段目に「忠臣蔵」の勘平不祥事の先行的描写を思わせる部分がある。それは、頭振吉高(吉良上野介にあたる)が遊女の誉れ高い茨木屋の倉橋を身請けしようと乗りだした時、その目前で日頃から倉橋と通じていた二見浅間之介(浅野内匠頭にあたる)が身請けの話をまともてしまう。これに逆上した頭振が遊里から帰る二見を襲いかかる。この時二見の家来伝助は愛人吉田と会っていたため役に立たない、という場面である。「今昔操年代記」や「伝奇作者」に書かれてある所を信用すれば、「忠臣蔵」の一作者並木千柳は西沢一風と師弟関係であったのだから、千柳が師一風の作品を読む機会は十分あったであろう。

次は勘平が事件に気が付きあわてて御門に駆けつける所。これは浅野家の内証用人兼小姓頭であった片岡源五右衛門高房が、城中刃傷の噂を伴待で聞いて、事態の真相をさぐりにいった話が基になったと容易に想像がつく。「忠臣蔵」では勘平の言葉で「なるほど裏門合点。表御門は家中の大ぜい早馬にて寄りつかれず。喧嘩の様子は何んとく。」とある。これは「多門伝八郎覚書」に「然る所大手下馬桜田下馬等喧嘩姓名等不相知、自分々々の主人を案事及大騒動、御玄関前、中の口迄も、追々乱入りたく候由、<sup>(5)</sup>という記述に共通する。「義士亡身」(「胆心精義録」の抄本)では「諸大名の供廻り、上を下へと混乱す、己れ己れが屋敷々々へ注進すると否や駿馬頻りに馳せ来て、既に大下馬前稲麻の如く打囲み、錐を立るの地なし、長矩の家臣片岡源五右衛門、主君の乗替の名馬に鞭て、

一文字に駈付と云へども、御門の警固嚴重にして、可入様ぞなかりける、<sup>(6)</sup>という風に書いている。またこの混乱の様子は戯作者の好む所であり、例えば赤穂事件を脚色した近松門左衛門の「碁盤太平記」(宝永七年刊)の冒頭にも、この混乱ぶりが利用されている。またこれは古典集成の頭注で指摘されているが、青木鷺水の浮世草子「高名太平記」(刊年不明)巻之一でも高見之丞御用人の片岡善五郎が主君の面会許されず門前払いを受ける場面がある。この他江島其磧の浮世草子で、これも赤穂事件を遊女の仇討ちにおきかえた「けいせい伝授紙子」(宝永七年刊)巻一ノ三にも同じ様な場面が見える。さらに、実録物では「赤穂精義内侍所」巻之六や「誠忠武鑑」<sup>(7)</sup>巻之一にも片岡源五右衛門が馬でかけつけるが門前にて止められる様子が描かれている。

ところで、この「赤穂精義内侍所」という書物は長編の実録物でありながら、今までそれ程見直されていない。これは成立年代の不確かさや、現在残る書物のほとんどが写本であり、原型の書物が後に増補していった可能性もある書物であるため、文学・歴史分野においての一資料としての検討は避けられがらだったと思える。しかし、「伝奇作者」のなかには「忠臣蔵狂言の説」をはじめ数箇所の項目に「赤穂精義」の書名が引かれている事等を考えれば、「忠臣蔵」成立の参考文献を数える上で無視する訳にはいかない。そこで典拠云々の断定は避けるが、この後参考程度とはいえ価値ある書物として随時紹介に努めてゆく事にする。

余談にわたるが「多門伝八郎覚書」には片岡源五右衛門が切腹前の浅野内匠頭に特別の計らいで接見が許される事が書かれている。

この史実は言うまでもなく、四段目の判官・由良之助に生かされていると思える。

次は自己の過ちに堪え兼ねた勘平が切腹しようとするが、お軽に止められる場面である。この行動の原型を実在の赤穂浪士の一人・横川勘平宗利の逸話に見るむきがある(例・藤野義雄「仮名手本忠臣蔵 解釈と研究」)。確かに「赤城士話」には横川勘平が大石内蔵助に切腹を止められる話があり、また「勘平」という同名から、前のような見方をしがちになる事もわかる。しかし、「赤穂義人録」・「赤穂鐘秀記」等には同じく赤穂浪士の一人・矢頭右衛門七の話として、病死した父に代って討入りの仲間入りを願うが許されず、切腹しようとする所を内蔵助に止められたという記述がある。つまり、切腹を止められるというだけの話ならば、横川勘平に限ったことではない。さらにここで「忠臣蔵」に先行する浮世草子に目をやれば、この切腹を止められるという設定は多く見受けられる。「傾城武道桜」巻一・「けいせい伝授紙子」巻一ノ四・「高名太平記」巻一・「忠義武道播磨石」(宝永八年刊)巻一ノ三・四ノ三、「忠義太平記大全」(享保二年刊)巻六ノ二・八ノ四・十ノ二などにある<sup>(8)</sup>。このうち特に「けいせい伝授紙子」の例は、恋女房に切腹を止められる様子が描かれていて「忠臣蔵」の場面に酷似している<sup>(9)</sup>。さて、これらの例から見て、切腹を止められる勘平の設定は、横川勘平の逸話からの引用というよりも「忠臣蔵」の先行浮世草子の定型を利用したと考えたい。

前にも書いた通り、切腹に関する横川勘平の話が早野勘平の話に流用されたとは考えない。ただ、横川勘平と早野勘平の同名は、や

はり留意されて然るべきだろう。その理由の一つをあげれば、赤穂浪士の記録を書きとめた書物には、萱野三平と横川勘平が隣りあうように記されたものが多いという事が言える。たとえば、「介石記」・「赤穂義人録」などがそうである。つまり、この記述を読んだ物語の創り手が、三平と勘平を意図的に混用した可能性がない訳ではないという事である。そして、この三平・勘平の混用があったとすれば、「忠臣蔵」の先行浄瑠璃としてよく知られている「忠臣金短冊」(享保十二年)の早野勘平と考えるよりも、さらに遡った「忠義太平記大全」巻五ノ三の吉野勘平が最初の混用の例と言えよう。

(この吉野勘平については後に言及する。)また混用という意味で言えば、「江赤見聞記」に記された、遊女と心中した浪士・橋本平左衛門の話が、萱野三平の逸話と相交って出来たのが「忠臣蔵」の勘平である、という指摘がよく見られる(例・渡辺世祐「正史赤穂義士」)。この一説を強調するつもりはないが、「傾城武道桜」の伝助が勘平の前身だと仮定すれば、女にだらしがらない平左衛門の逸話が勘平像成立に少なからず働いたとも言えよう。また、横川勘平同様に平左衛門の記述も萱野三平に接近した形で諸々の文献に見られる点は、一応の注意を払っておくべきだろう。

三段目切。天保四年に形が出来上った歌舞伎でのお軽勘平の道行に較べて、浄瑠璃での山崎へゆくお軽勘平は、かなり地味である。ただ、それでも、鷺坂伴内との立ちまわり等、基本的には同じである。この伴内については付記にまわす。

五段目。獵師になっていた勘平が浪士の一人・千崎弥五郎と火の無心から山中で邂逅する。この件については、古典集成の頭注に

「傾城八花形」四段目・「忠義武道播磨石」卷之三が前例になるという指摘がされている。尚この他、「けいせい伝授紙子」卷二ノ五にも火の無心からの出会いがある。ところで、これらはいくまで火の無心を媒介とした出会いに、こだわった見方にすぎない。そこでこの設定を大きく捉え直し、勘平・弥五郎に限らず「忠臣蔵」の登場人物が、偶然人と出くわし、周囲を憚りながら話を交さねばならない状況を想い起せば、これも赤穂浪士の話に似たようなものがある。「赤穂精義内侍所」卷二十六には、神崎与五郎・横川勘平・岡野金右衛門の浪士三人が商人に変装し江戸に下った時、偶然江戸の街中で同じく商人に身をやつした間兄弟と出会う様子が描かれている。

この時、彼らは仇討の日も迫ってきた事もあって、今後の計略を小声でお互いに伝えあっている。これとほぼ同じ話は、「播磨梶原」にもある。「忠臣蔵」の千崎弥五郎は実在の浪士・神崎与五郎に相当する人物であり、与五郎は吉良家の動向を探る等、江戸潜伏中の浪士のなかで最も活躍した一人である。「忠臣蔵」の作者らは、千崎弥五郎の描き方からして、当然この事は知識にあったと思える。更に、「忠臣蔵」の弥五郎と勘平が真夜中の山中でありながら、周囲を気にして話す設定には無理が感じられないだろうか。そこで、若干の深読みをすれば、これは前のような江戸街中での浪士達の様子を語る話が巷間にあつて、それが不自然に脚色された結果かもしれない。いずれにせよ、前の「赤穂精義内侍所」等の記述と「忠臣蔵」の相互関係が、まるで検討を要しないはずはない。さらに、前の「赤穂精義内侍所」卷二十六では、神崎らが間兄弟に遭遇した後、同じく卷二十六で萱野三平の切腹の話が描き込まれている事を書き添え

ておく。

### 定九郎の原図

周知のように、現在歌舞伎における定九郎の身なりは、鷹の羽の紋つきで黒羽二重、鬘は五分月代の浪人風で登場する。しかし、これは初代中村仲蔵の発案として知られるものであって、(伊原敏郎『近世日本演劇史』によれば五世団十郎の修行講から考えだされたもの)それまでの身なりは、「大百日の鬘」に山岡頭巾をかぶり、大縞のどてらに丸ぐけの帯、紐付の股引、五枚がさねの草鞋を常例とし、(同)であり山賊の風態である。この経緯を踏まえて「忠臣蔵」の五段目を見てゆきたい。

父斧九郎兵衛とともに浅野家を飛びだすが、その父にも見放された浪籍者の成れの果てが、切り取り強盗の定九郎であった。前にも書いたが、この定九郎が与市兵衛を殺し、更にその定九郎に勘平の撃った玉が当り話がこじれて展開するのが、五段目切から六段目である。さて、この五・六段目は「忠義太平記大全」卷五ノ三の場面を踏まえて構想したものだ、古典集成の頭注では説明している。次のようなものである。

浪士の一人である吉野勘平は、ある時故郷に赴いた。その夜道七・八人の山賊にからまれ、酒代をせがまれる。仕方なく着物を脱ぎ捨てる勘平。ところが、拝領の刀にまで山賊が手を伸ばしたので怒って孤軍奮闘。三人切り倒した後、さらに逃げる輩を深追いして、自らも足に傷を負う。翌朝、山人によって勘平は戸板で運ばれ実家につく。ここで仇討ちに参加できない体を自覚し切腹する。

尚この後、吉野勘平の妻が勘平の遺書を大星由良之助に届けに行つた点や、(萱野三平には大石蔵之助にあてたと言われる遺書がある)名前の類似から言っても、「忠義太平記大全」の作者が萱野三平を意識して吉野勘平を創つたと考えられる。

さて、この「忠義太平記大全」巻五―三の話は、「忠臣蔵」の五・六段目の本質になるには適当とも思える先行場面である。そこで、さらにこの場面の出典になり得る記述を捜せば、多分これも赤穂浪士・岡島八十右衛門の逸話がもとになったと思える。その逸話というのは、「赤穂精義内侍所」巻十五・「誠忠武鑑」巻之一に見える次のようなものである。

ある時、岡島八十右衛門は供の文助を連れて、赤穂城より七里程離れた山中に湯治に向つた。そして日も暮れた山道、七、八人の山賊に出くわし酒代を置いてゆけと凄まれる。ところが、八十右衛門はその要求にのどころか、立ちどころに三人を切り倒す。その見事に驚いた他の山賊は、いずこともなく逃げていった。

因みに福本日南は、この話が山崎美成の「赤穂義士伝一夕話」(嘉永七年刊)のみに記されたものと「元禄快拳録」のなかで言っているが、今見たようにそれは間違いである。「赤穂義士伝一夕話」の文は、「赤穂精義内侍所」に言いまわしまで似ているので、両書の関係は密接だと想像できる。さて、「赤穂精義内侍所」は成立に検討を要する書物であるから、出典等々の断定は、ここでも差し控えて、前の「忠義太平記大全」巻五ノ三の明々白々な先行場面をひく事にする。「忠義武道播磨石」巻之三「五月川十野右衛門盗人を切る事」に、次のようにある。

「並木のごとき荒男七、八人をつとりまわし。これく旅人酒手を給へと。理ふ尽に十野右衛門がかたにむすびし油単に手をかけ引ほとくを横へ飛のき。女房をうしろにかこひ。おのれらよるな。多いていの旅人と思ひて怪我するな。のいてとほせといひあへぬことばの下より盗賊共。みなぬきつれて。きつてかかる。十野右衛門は女ほうにさしそへをわたし。其身は二尺六寸。備前なるみつおぼへのかたな。請て、み成仏せよと。手もとの三人車ざり。大げさ。小げさにうちはず。女房が手にかけて盗賊の片腕を。二人同じくうちをとせば。残る三人逃行を。あまさにと追つめてむかふなるきしうへにて一人のもろすねなげばそのひまに。二人は逃のび行衡なし。」<sup>(10)</sup>

書き遅れたが、「赤穂精義内侍所」の序・奥書にある「二千風」・「円喜」の号等から、同書は元禄の浮世草子作家・都の錦が著したものだとした、野間光辰氏の研究があり、これは定説になっている。さらに、野間氏の説に従えば、「忠義武道播磨石」・「忠義太平記大全」の二書も都の錦の手になるものだとしている。ほぼ確実に都の錦の作だと言える「播磨相原」と、前二書の内容・構成上の類似点を抽出できる場面もあり、前二書が野間氏の言うように、都の錦によって書かれた可能性は低くないと思える。勿論、似ているというだけで、同一作者だと判断するのは愚かな事故に、断定は自重しておく。

野間氏の説が正しいとすれば、都の錦の手によって岡島八十右衛門の逸話が、「忠義武道播磨石」の五月川十野右衛門の話に移され、さらに「忠義太平記大全」の吉野勘平の話に発展したと自然に推測

(12)  
できる。

○  
勘平自身に論を戻す。勘平は主君の仇討ちに堂々の参加を願って、御用金の調達等、力を尽す。また、お軽やその父与市兵衛も勘平のために、影ながらの援助を措きまず、その気持ちがお軽の身売りという形であられる。このような自らの名誉の挽回の苦勞という話は、これも実在の赤穂浪士・不破数右衛門の逸話が源流になったものと思える。数右衛門は、ある事から勘気を受け同士のものを一時離れていたが、結局その志が認められ泉岳寺の主君の墓前で、大石蔵之助に許された。という話が「赤穂鐘秀記」巻之中などに書かれている。この話は、「忠義太平記大全」巻六ノ三に取り入れられている。ここでは、関屋勝右衛門という者が、再三再四の願入りによって大岸由良之助に、主君の墓前で連中の一人になる事が許されている。また、「高名太平記」三ノ二でも、不破笠右衛門が同様な描かれ方をされている。

勘平が山崎において獵師になるという設定は、明治期の歴史学者・重野安緯が「泉岳寺書上」(元禄十五年)の一文から、発案されたものだと言っている。<sup>(13)</sup>確かに「泉岳寺書上」には、勘平のモデル萱野三平について、「此三平は武芸に達て、第一鉄砲の名人なり」とある。ところで、この「泉岳寺書上」という書物には従来より偽書説がある。勿論、作家が作品を創るにあたって、偽書であるから出典にできないと、必ずしも固く考える訳はないから、偽書云々は気にかける事もなさそうだが、この書の場合は三田村鳶魚が

寛政以降(一七八九)に成立したと称えている。<sup>(14)</sup>(前の重野も成立期は「忠臣蔵」より前と考えているが、「泉岳寺書上」を偽書だと判断している。)つまり、三田村説によれば、「泉岳寺書上」は「忠臣蔵」よりも後に出来た物であるから、「忠臣蔵」の出典文献から除外しなければならぬという事になる。「泉岳寺書上」には享和三年の識語がある。享和三年は四十七士の死から百年にあたり、あるいは、この年に古くから伝わった書物として、もっともらしく偽筆したとも憶測できる。尚、赤穂浪士と鉄砲打ちが結びついた話では、「武道三國志」(正徳二年刊)巻之十ノ一がまず挙げられる。ここでは大岸力弥が大筒の達人として描きだされている。

勘平が猪を射ったと思ったのも束の間、実はそれは人間・定九郎であり、さらにその人を舅与市兵衛だと思ひ込み切腹する、という複雑な構成の原拠になりそうな話は、今の所実録物・浮世草子に見あたらない。歌舞伎・浄瑠璃史の「忠臣蔵」研究でも、そのような指摘はみえていない。そこで、この部分については、「忠臣蔵」作者らの独創性の高いものと思えるが、断定は控える。ただこの一連の話について、わずかに私論を述べれば、これは西鶴の浮世草子「武道伝来記」を代表にできる仇討奇譚話の流れに属するものではなからうか。という理由の一つには、「忠臣蔵」のなか原郷右衛門の言葉で、「思はずもそのはうが舅の敵討つたるは。いまだ武運に尽きざるところ。弓矢神の御恵みにて。一功立つたる勘平。」とあり、これから、この話が勘平の舅の恨みをはらす仇討ちだったと、とらえ得る可能性をもった話だと示唆しているからである。つまり、獵師・勘平の死に至るまでの物語は、屈折した一つの仇討譚だったの



である。そして、このように粗筋が複雑で、かつ因果応報の悲惨な  
仇討譚は、前にあげた「武道伝来記」をさがげに、「武道三国志」・  
「国花諸士鑑」(正徳四年)等々、特に正徳期の浮世草子には多く  
存在する。長谷川強氏は、この正徳期の浮世草子について、赤穂事  
件を素材にした作品が多く出版された事を指摘するとともに、「奇  
を求め義理を強調する」仇討ち話が頻繁に創作されたと例挙説明し  
ている。<sup>(15)</sup> 故に、「忠臣蔵」山崎街道の一件は、「忠義太平記大全」巻  
五ノ三の構想を下敷に、正徳期盛んであった仇討ち譚に影響された  
ものであったと考えている。

六段目。お軽が夫のために身を売るといふ設定は、古典集成の頭  
注にも書かれている様に、何も義士物に限った事ではなく歌舞伎・  
浄瑠璃に多く見受けられる方法なので深く詮索しないでおく。

お軽が身売りの一文字屋について、古典集成の頭注では「色道  
大鏡」(延宝六年序)・「傾城色三味線」(元禄十四年)・「忠義武道播  
磨石」に一文字屋が登場すると記している。さて、この頭注を少し  
補っておけば、一文字屋は西鶴の「好色一代男」(天和二年刊)や、  
赤穂事件を遊女の仇討ちにやつした「傾城播磨石」(宝永四年刊)  
にも見える。また「赤穂精義内侍所」巻二十五には、大石蔵之助が  
一文字屋の柏木と親しんだ事が描かれている。「赤穂精義内侍所」  
は、前にも触れたように成立に検討を要するので除外すれば、「色  
道大鏡」と「傾城色三味線」と「好色一代男」は赤穂事件より前の  
刊行であるから、一文字屋を赤穂浪士と関連させたのは、今の所  
「傾城播磨石」がはじめてと言える。ところで、お軽のモデルにつ  
いては、以前より大石内蔵助が山科で囲った妾であるという説があ

る。「赤城義臣伝」巻之七には、「洛陽二條通寺町の辺り二文字屋次  
郎左衛門と云ふ者の女むすめ閑流其名の容色よろしくえん艶なるを納れて妾むすめとす」とあ  
る。この「閑流」(同巻別所に「愛妾軽女」とある)が「忠臣蔵」  
のお軽であると言うよりも、ここでは閑流の出所が二文字屋である  
という点に注意しておきたい。

六段目。勘平は姑に責められ、同志に責められ切腹して果てる。  
この場面こそ、早野勘平の本命的モデル、萱野三平の逸話が生かさ  
れている所である。今まで見てきた勘平像の原型には、凶らずも萱  
野三平の影は薄かった。けれども、勘平の最大の見せ場である切腹  
に、三平の逸話が用いられたというだけでも、三平のモデル的役割  
は小さいものではなかったと言えよう。

伊藤東涯の「萱野三平伝」・「江赤見聞記」・「忠誠後鑑録」・「赤城  
士話」等々が伝える三平の記録はほぼ一致している。三平は浅野内  
匠頭の中小姓として常に江戸において、殿中での事件の時も伴として  
控えていた。そして事件を知るや、片岡源五右衛門の命で事件の報  
告を、早水藤左衛門とともに早駕籠で赤穂にもたらず。その途中母  
親の葬列に出くわすが、列に加わる事もなかったという。仇討ちの  
同盟に参加した後、故郷摂津萱野に一旦帰るが、父七郎左衛門に江  
戸行きを許されず、逆に奉公口を持ち込まれる。父の命に背く訳に  
はゆかず、かと言って、同志の誓いを裏切る事もできない。ついに  
煩悶の末、遺書を認め切腹に及ぶ。というのが、文献によっては、  
多少の相違はあるものの、おおまかに三平について知られている事  
である。ちなみに、「赤穂精義内侍所」巻二十一には、三平は武芸  
好きで、剣の修行に余念がない頃、浪籍者を捕えた腕を浅野内匠頭

に見込まれて家来になったとある。

是まで勘平のモデルが萱野三平であると言われながらも、それほど共通性が見られないという理由のためか、三平の存在は軽視されがちであった。しかし、「堀内伝右衛門覚書」には京都の街で三平の死が噂になった事を記し、大石内蔵助が「存生に居候は、成程一列に加り申候志の者にて」と語ったとある。また「忠誠後鑑録」にも内蔵助が三平の死をひどく惜しんだ事が描かれている。つまり、三平の死は並々ならぬ愛惜の念を、浪士やその周辺の人々の心に与えており、少くとも話題性に富んだものだったと考えておくべきだろう。故に、三平の逸話を近世作家が作品の素材にしたところで何ら不思議ではない。

虚構における三平の逸話の生かされ方の多くは、同志の義理と父親の敵命の板挟みに懊悩した三平の姿を基礎にしている。たとえば、冒頭の書きだしなどから「介石記」を参考資料にして成ったと思える「傾城播磨石」巻之二には、次のような話がある。浅香名所え助の仇討ちを心に秘めた一文字屋の小倉は、ある時西国の武士に言い寄られる。名所之助への義理立てと、現実の生活の狭間に苦しみ自殺を決意する。また、江島其磧の「忠臣略太平記」(刊年不明)四之巻三「忠と孝との二つ縄心のいましめ」は、父親の命と義士の忠義の撰択に苦しみ切腹する遠里忠平次の話があり、これなどは三平の切腹をそのまま利用している。この他、既に高田衛氏が勘平のモデル的人物だと指摘しているが、「忠義武道播磨石」には滝井杉之丞という人物がいる。同書巻之二、杉之丞が九州に身を忍ばせていた頃、世話になった家の一人娘と恋におちる。この事が娘の家側に

れ、早々と結婚話がすすめられる。娘の気持ちを考えれば、これを無下に断る訳にはゆかず、しかし親にも隠さねばならない同士の誓いを持つ杉之丞には、この話にのる事はできない。思い悩んだ末、ついに切腹。この杉之丞は、この話の前に由良之助に切腹を止められる場面をもち、また、都落ちし九州くんだりまでゆく理由も女性を巡るもめ事であるから、なるほど「忠臣蔵」の勘平のかかえる要素はそろっている。尚、この滝井杉之丞の話は「赤穂精義内侍所」・「誠忠武鑑」に書かれた菅谷半之丞の話と共通する部分がある。

この様に、三平のジレンマは「忠臣蔵」に至る前すでに、よりよい題材として浮世草子作家に採り上げられていたのである。そこで、この系譜のもとに「忠臣蔵」の勘平の位置を確かめたい。原郷右衛門と千崎弥五郎の勘平への責めは、性質的には相当異っているが、心中秘かに重圧を感じる、三平の浪士に対する忠誠心を具体化したものであり、姑の激しい口説きは、父に懇々と悟される三平の姿が投影したものであろう。

さて、勘平の切腹である。これは勿論、前に書いた三平の苦悶の切腹を受けたに違いない。ただし、勘平の切腹は突発的だが、三平の場合は浅野内匠頭の月違いの命日に計画的に行われている。続けて、勘平の切腹にこだわってみたい。脇指を腹に突きさした勘平は、舅殺しの汚名が消えて、連名状の血判が許される。この時「忠臣蔵」では、「腹十文字にかき切り。臓腑をつかんでしっかと押し」と、かなり凄絶に描出されている。しかし、三平の切腹については以上の様な記録は見当らない。そこでまた、この勘平の切腹も先行の浮世草子に典故を求めれば、「忠義太平記大全」巻五―二に仇討

ちに参加できなくなった野金岡右衛門が切腹する話のなかに、着目すべき一筋がある。

「さるによってわれはやしのびやかに切腹せり。いそぎなんぢ介錯せよ。これみよと肌をぬけば。腹十文字にかき切り。はら

わたをつかみ出し。水をもって。内をあらひそゝぎをけり。」<sup>(18)</sup>

同書巻五ノ三は、前に論じた吉野勘平が登場するところであり、「忠臣蔵」の作者は五・六段を創作するにあたって、吉野勘平の話を大いに参考にしつつ、そのすぐ前に書かれた野金岡右衛門の切腹場面を取り入れ、勘平切腹までを完成した思える。

次に、勘平の切腹がとんだ早合点であったという設定について考えたい。既に推論は述べたが、これは奇異的な仇討ち話の一手法で、不条理な結果が演出されたものとも思う。また、別の見地から言えば、この早とちりは、有能な三平の死を痛恨して止まぬ人々のやる瀧ない感情が、背後に存在したからこそできた形とも言える。さらに、浮世草子に見られた早まった自殺の例を二つ挙げるとすれば、まず西沢一風の「御前義経記」（元禄十三年）。この最後に主人公今義が畜生道におちたと思ひ込み、入水自殺している。もう一つは、「高名太平記」巻九である。浪士一行が首級を挙げた後、主君の墓前に赴き殉死を避けるため土偶を用いる手はずだったのに、一早く片岡善五郎が切腹してしまっている。

自害したものが討入りの人数に加えられるというのは、古典集成の頭注で指摘されているように、類似した場面が「忠義武道播磨石」巻五ノ一にある。眼病を患った橋本平内が、討入りに参加できないと絶望し切腹する話である。また、自殺にこだわらなければ、近松

の「碁盤太平記」では、死んだ寺岡父子を同志の人数に入れていゝる。ところで、古典集成では先の巻五ノ一を切腹した者が討入一行に加えられた先行例としてだけの指摘にとどまっている。しかし、この所で一行の人数に加えるという主旨の事を大岸由良之助が言ったあと、それに続く同じく由良之助の言葉は見逃がせない。その前後を引用しておく。

「将又一味四十七人。其うへに平内をくわへ。四十八人と名のるべく。此法名の書付を某其場へも懐中し。人々へも被露せん心やすくおもわるべし。扱平内病中に困窮いたされたるよし尤も有あわせたる金子百両送る也。是にていかにも老の身をかたよせ給へとさし出せば。有がたやたのもしや。」

この部分の前半から人数の件は勿論、さらに姑おかやが郷右衛門に勘平の財布を仇討ちの供に連れていってくれと頼み、それを十一段目、大星由良之助が墓前で懐中から出した流れも、一応連想できる。後半からは、六段目の最後で郷右衛門が言う、「首にかけたるこの金は。婿と舅の七々日。四十九日や五十両。合はせて百両百ヶ日の追善供養。跡ねんごろに弔はれよ。」という文句に共通している。つまり、この橋本平内の描かれ方は、人数云々に限らず六段目切の場面に、大きな模倣を及ぼしたと思える。

最後に、「忠臣蔵」の勘平を語る上で触れなければならないのが十一段目の焼香の場面であろう。古典集成の頭注では、「忠義武道播磨石」巻六・「忠義太平記大全」巻九一三に見える焼香の場面を、利用したという指摘がされている。ただ、死んだ者を焼香の若い順番にするような記述は右の二書になく、いずれも順番を巡って

のささやかな話しあいがあるのみである。先の重野安繹は「泉岳寺書上」に書かれた一文（引用省略）に拠ったと説いているが、前にも書いたように同書は成立時が如何わしいので度外視したい。

「忠臣蔵」の作者が焼香の順番にこだわって描いた事については、勘平の無念の生涯を追想させる場面としてだけ考えがちである。しかし、浄瑠璃坂の仇討の発端が、焼香の順番争いであった事などを想い込めば、焼香の順番というものさえ武士同士では繊細な配慮を要する場合があるという事を知った上で、「忠臣蔵」の焼香場面を見るべきだろう。

以上、早野勘平像の形成まで浮世草子を中心に、先行作品が果たした役割を書いてみた。「忠臣金短冊」の早野勘平を、「忠臣蔵」の早野勘平と直列に論じられる事が多いが、この両勘平は、むしろ引き離して考察されるべきに思う。「忠臣蔵」の勘平成立は、「忠臣金短冊」で早野勘平なる人物を創り上げた千柳の働きが大きかったに違いない。千柳は前勘平を「忠臣蔵」の勘平に移しかえる時、名前だけそのままに全く別の早野勘平を完成したのではないか。そして、この際、千柳が最も出典材料にしたジャンルが浮世草子だったと思える。特に、「忠義武道播磨石」・「忠義太平記大全」が勘平像形成に与えただろう影響は軽視できない。またこの二書は、勘平に限らず今後「忠臣蔵」の成立を語る上で等閑にされてはならないと思う。

### 付記・鷺坂伴内

歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」に現れる鷺坂伴内は敵役ながら、ユーモラスで憎めない役廻である。特に三段目切、お軽勘平道行に花四

天を引き連れて登場する伴内は見事な道化を演じて、大衆の共感を得るにやまない。ただ、この道行の演出は前記したように天保四年に出来たものであるから、歌舞伎三段目の「エヘンバッサリ」の場面とともに、そもその浄瑠璃における伴内にはないものである。けれども、浄瑠璃での伴内も粗忽な三枚目である事には違いない。

さて、この愛すべき悪役鷺坂伴内のモデルは、吉良家の中小姓清水一学であるとする説があり、これを三田村鳶魚が詳しく説明している。<sup>(19)</sup>それを要約すると、三河国幡豆郡宮迫の円融寺には清水一学の墓があり、地元の人から「伴内さん」の墓と親しまれている。また上方役者も度々墓参りするという。(但し、三田村はこの件について単に宮迫の人が一学＝伴内という伝説を信じただけで、特に裏付ける資料はないと断っている。)鷺坂という名前については、三河の地名にちなんだものと考証し、伴内という名については「義残後覚」に見える「伴内」という咄の名人から用いたと言っている。そして、この「義残後覚」の伴内は曾呂利新左衛門だと考えている。さらに、清水一学を伴内に仕立てあげた理由を、吉良家の内にあって、唯一大衆から同情を得た一学を憎悪の対象から外すため、笑いのなかに隠したと述べている。

ところが、この説に対して藤野義雄氏は並木千柳の先行浄瑠璃から、鷺坂伴内に至り得る先行的人物を三人紹介して暗に三田村説を否定している。<sup>(20)</sup>まず、「後三年奥州軍記」(享保十三年)の黒川伴内、次に「道成寺現在蛇鱗」(寛保二年)の岩倉伴内、そして「軍法富士見西行」(延享二年)の蟹坂伴内である。この藤野氏の紹介をたよりに、これら三伴内を見てみよう。まず黒川伴内。清原陸奥守

武衡、その兄弟の出羽守家衡は、源義家との畦みあい絶えない。ある時、義家の氏神、石清水八幡の宮司で陰陽博士の安倍仲成が陣中見舞と称して、家衡方を訪ねる。一担は招き入れる家衡であったが、味方ではないとして黒川伴内を仲成に向け襲わせる。しかし、あっさり伴内は返討ちにあう。次は岩倉伴内。皇太子の即位を巡って公家達の冷戦が開かれていた。一の宮を推す右大弁紀広純は、親王を奪いとる計画をたて、この悪事に郎党岩倉伴内も参加させる。ところが、この伴内も対立する和氣藏人を騙討ちしようとして返討ちにあう。最後に蟹坂伴内。この伴内、公家猫間の雑掌でありながら主君を裏切り、悪玉の鼓判官と結託。にせの猫間をこしらえ、鼓判官とともに木曾義仲の愛妻を追っかけ襲いかかる。しかし、ここでも伴内は手塚太郎らに返討ちにされる。

「忠臣蔵」三段目切では、お軽勘平を追っかけてきた鷺坂伴内が逆に勘平に捕えられ、刺殺されそうになる。また歌舞伎では見られないが、十一段目切討ち入りを果たした浪士一行の前に、伴内が薬師寺次郎とともに現れ一刀を浴びせんと襲いかかっている。しかし、伴内は薬師寺ともども苦も無く返り討ちにされてしまう。このような「忠臣蔵」の伴内の描かれ方、また名前の類似から見ても、前の三伴内の延長線上に鷺坂伴内があると把握すべきだろう。つまり、以上の事から、三田村が言う「忠臣蔵」執筆時に、伴内という名とその性格を捻り出したとする説は、間違っている。「忠臣蔵」の作者が鷺坂伴内を描出する際、仮りに清水一学に連想が及ぶ事があったとしても、本質的に鷺坂伴内のモデルはいないと断定できる。ただ、伴内という名を曾呂利新左衛門の異名・伴内（大道寺友山の

「岩淵夜話」書かれてある）からとったという三田村説は、完全に否定できない。

ところで、鷺坂伴内、それに先行する三伴内の前に記した様な描かれ方は、何を出典にしているのだろうか。あくまで推測の域をでないが、ここに自説を述べたいと思う。「傾城武道桜」巻二は、大事の場に居あわせなかった勘平の先例として伝助の話の前に書いた。この同書巻二を、繰り返すようだが簡約して次に書く事にする。

頭振吉高は茨木屋の倉橋を身請けしようと考え、傾城の里に赴く。ところが目前で、倉橋が二見浅間之介に身請けされる事を知り怒る。そして、日頃自分に侍りつく太鼓の佐助に悪事を語る。佐助は金で買収した男達とともに、色里から帰る浅間之介を襲うべく暗がりで待つ。浅間之介の供・伝助は自分の恋に夢中で傍に気づかずに（既に紹介）、浅間之介が堀にさしかかった所で佐助らが騙討ちに及ぶ。ところが、雇った男達は役にたたず、佐助も浅間之介の一突きで絶命する。

千柳がこの「傾城武道桜」を読んだであろう事については既に触れた。思うに千柳は、この太鼓の佐助の性格・行動を基に、道化する権力者の腰巾着で、その死は常に返り討ちという、伴内像を考え出したのではないか。

#### 注記

- (1) 「国文学 解釈と鑑賞」昭和四十二年十二月号
- (2) 「仮名手本忠臣蔵」の本文引用は総て、新潮日本古典集成「浄

瑠璃集」所収の同作品による。

- (3) 本蔵のモデルを亀井家老、多胡主水とする見方は、「事実文編」の多胡主水記・福本日南の「元禄快拳真相録」の考証が今まで影響していると思える。しかし、「事実文編」そのものが実証性に乏しい書物と言われ、また日南も多胡主水に関して深い時代的検証はしていない。「津和野町史」・「藩史大事典」等によれば、主水と称したのは二人いて、多胡真清とその子息・多胡真武である。ところが、この両者とも本蔵に相応するような逸話はもたず、本蔵と似たような話があるのは、真武の弟・外記こと多胡真陰である。

- (4) 「古今四十七大家評注仮名手本忠臣蔵」南茂樹編・明治四十四年・朝野書店。同書所収の「前作との関係より見たる仮名手本忠臣蔵」。尚、「傾城武道桜」は近世文芸叢書本を参照。

- (5) 「多門伝八郎覚書」・「義士亡身」・「泉岳寺書上」・「堀内伝右衛門覚書」の引用は総て「赤穂義人纂書」

- (6) 当論文を作成するにあたって主に閲覧した「赤穂精義内侍所」は、国立国会図書館蔵の母念寺発行(S・45)三角寛監修の「赤穂精義」・明治十五年刊の「今古赤穂精義参考内侍所」である。また国文学資料館のマイクロフィルムで次のものも多く参考にした。酒田市光丘図書館蔵・写本「赤穂精義内侍所」(三十巻全三十冊のうち欠二巻二冊)・高知県立図書館(山内文庫)蔵・写本「赤穂精義内侍所」(全五十巻九冊のうち三冊欠)。以上四書は序・刊記等の有無・編纂方法の相違はあるが内容はほぼ同じ。尚、同所マイクロフィルムにある

奈良県大橋正勝氏所蔵の写本「赤穂精義内侍所」(全二十二巻二十二冊のうち欠一卷一冊)は、前四書と同名異本。

- (7) 明治四十二年刊・文昌閣の「誠忠武鑑」全巻を、当論文作成中閲覧した。これは浪士堀部弥兵衛の孫・堀部次郎が著したものと知られ、代々写本で堀部家に伝わった書物であり、武島羽衣が字句不明の箇所を補い、刊行にさいして明治四十二年の序を付した。ところで「国書総目録」には「誠忠武鑑」の項目は一つしかないが、「誠忠武鑑」という名の書物は少くとも二種ある。例えば、国立国会図書館蔵の「誠忠武鑑」(写本五巻三冊・天地人の三部構成)は、前の同名書物とは全然中身が違う。尚、堀部伝本の「誠忠武鑑」は「赤穂精義内侍所」との類似性が多く抽出できる。何らかの関係があったと思え、以後の研究課題とする。

- (8) 「けいせい伝授紙子」は新日本古典大系本・「高名太平記」は「青水鷲水集」(小川武彦編)・「忠義武道播磨石」は帝国文庫本・「忠義太平記大全」は徳川文芸類聚本をそれぞれ参照。

- (9) 「けいせい伝授紙子」の前半そのものが「忠臣蔵」に似ている。この模倣性については、浄瑠璃「鬼鹿毛武佐志鑑」とからめて、長谷川強氏の「浮世草子の研究」に詳しい。

- (10) 国立国会図書館蔵 宝永八年刊

- (11) 「都の錦獄中獄外」 「近世作家伝攷」(昭和六十年中央公論社)所収の論文

- (12) 「五月川十野右衛門盗人を切る事」の話には挿絵がある(10の国会本)。複数の山賊達が身に付けている物に、山岡頭巾・

どてら(?)・草鞋などが見える。これは定九郎の前演出の衣装に影響を与えたのか、現在考慮中。

(13) 「赤穂義士実話」 大成館 明治二十二年

(14) 三田村篤魚全集第十六卷「講談の根本資料」 中央公論社

「書上」を寛政以降に成立したとする根拠の一つに三田村は、同書中にある「仕事師」という言葉を取り上げ、これは寛政以後にできたものだからだと述べている。三田村の寛政以降説に反論するつもりはないが、「仕事師」という言葉に限って言えば、「根無草」宝暦十三年(一七六三)刊・「聞上手」安永二年(一七七二)刊・「新版歌祭文」安永九年(一七八〇)刊・などに既に見える。また「仕事師」という言葉は、赤穂、周辺の方言にあるという気になる報告もある。高田十郎「播州小河の方言」(昭和五年)

(15) 「浮世草子の研究」 昭和四十四年 桜楓社

(16) 片島深淵子編 明治四十二年 日吉丸書房

(17) 「丸本『仮名手本忠臣蔵』覚書——勘平像の構図——」 日本文学研究資料叢書「浄瑠璃」(有精堂)所収の論文

(18) 国立国会図書館蔵 外題「忠義太平記」享保二年刊

(19) 三田村篤魚全集第十六卷「鷲坂伴内」

(20) 「仮名手本忠臣蔵解釈と研究」 昭和五十年 桜楓社

※

本稿を創るにあたって草稿段階から松田修先生の多大な御教示を受けた。末筆ながら謝意を表しておきたい。また、

高城あさ子氏には書籍閲覧等でお世話になりました。